複写・転送禁止

テクノロジーで書店をサポートし、出版業界を支える

株式会社　PubteX

代表取締役 社長執行役員　**永井 直彦** 氏

苦境に立たされているリアル書店と出版業界をテクノロジーでサポートしようとしているのが、丸紅グループと講談社、集英社、小学館が22年に設立したPubteXだ。23年夏に講談社、集英社、小学館の協力のもと、RFIDタグの装着がコミックスからスタートした。

返品コストを減らし出版界に貢献

業界の大きな課題として書店が急激に減少していること、恒常的な高い返品率が挙げられます。試算では返品による損失額は年間2,000億円以上にのぼります。サプライチェーンの効率を高めることで、そのコストを削減し、出版界に貢献します。そのためにAIを活用した発行・配本の最適化を図ります。また、RFIDを活用した書店オペレーションの効率化や万引き防止、売り伸ばしに繋がるソリューションを提供していきます。

コミックスのテストは良好

RFIDの装着は23年8月コミックスからスタートし、講談社、小学館、集英社に加え、12月からKADOKAWAの新刊でRFIDを装着した商品が書店に配本されています。

はさみ込まれた紙の中央にあるのがRFID

RFIDは薄く小型なので、しおり型、スリップ型、シール型など様々なタイプがあります。固定できるシール型がベストですが、コミックスであればフィルムラップされているのではさみ込みタイプでも抜け落ちることはほぼなく、製本ラインで大きなコストを掛けずに問題なく装着できています。

1点単位の“見える化”

RFIDの特徴は非接触で一括読み込みができ、1枚ごとにシリアルナンバーが附番されるので単品ごとの管理が可能です。出荷日や搬入日、書店の入出庫、購入日などが記録できます。現実的には入荷時の検品ができていない書店も多いようですが、RFIDならリーダーをかざすだけでまとめて検品でき、棚卸しも短時間で済みます。返品時の、取次に届くまでの在庫消し込みの時間的ラグも解消されます。9月より書店パイロットを開始し、書店の現場の意見を取り入れながら改良を重ねています。

PRや販促にも活用

RFIDを検知するプレートを書棚に設置し、その棚のコミックスを手に取るとディスプレイにPR映像が流れる、書店のロケーション登録と連携することで、いつどこで何が売れたかデータを取得できるなどPRや販促にも活用が出来ます。特定書店での購入を条件にした特典や、将来的には実績を元に販売条件を個別に設定することも可能です。

出版社側では、RFIDにより市場在庫をオンタイムで確認できます。またAIを活用した需要予測による重版時期アラートや発行・配本数の推奨値の提示などにより、適正な配本数・重版数を設定することが可能になります。

RFIDの価格は為替の関係もあり現在1枚10円ほどですが、数が増えれば価格を更に抑えられると考えています。多くの出版社で導入していただき、書店、取次、印刷・製本会社と協力しながら、販売効率の改善・持続可能な出版流通の実現に貢献してまいります。